

『コロイト・ブック』 西洋草木譜とその翻訳経緯

——松平定信の時代と『遠西独々涅槃草木譜』——

杉 本 つ と む

はじめに ここでの翻訳は、江戸時代、蘭書よりの翻訳をさす。そのため、時代的には、松平定信の生誕した宝暦八年（一七五八）より、死去の文政十二年（一八二九）の間を仮に、〈松平定信の時代〉と設定した。この間を蘭学隆盛の時代とするのは小稿を最初とするが、とりわけ、定信が老中首座として権力の座につく、天明七年（一七八七）より、辞職の寛政五年（一七九二）（定信の三十歳より三十五歳）の間である。蘭学史および江戸の学芸を考へれば、この定信の全生涯こそ、真に蘭学・蘭語学が樹立され、堅実な詳密な翻訳作業により、ヨーロッパの学芸が摂取、移植された充実した翻訳文化の時代と私考する。もっとも、そこには安永元年（一七七二）に老中となった田沼意次のいわゆる〈田沼時代〉も存在し、それなりに評価すべき点もあるが、こと学問においては、両者は質的に格別の落差をみる。学問研究における偽と真を峻別すべく、定信は強力に政治力まで行使したとみたい。

定信の時代と翻訳書 試みに、蘭書とその翻訳書について、時をおって列挙してみよう（印は刊本、無印は写本、×印は直接的ではないもの、*印は筆者による補記である）。

宝暦九年・一七五九×山脇東洋『歳志』刊。*日本最初の公的解剖図譜

同十三年・一七六三・北島見信『紅毛天地二図贅説』

明和二年・一七六五。平賀源内『火浣布略説』／。後藤梨春

『紅毛談』（『紅毛唐線毛』と改題）

明和六年・一七六九・山路徴之『和蘭緒言』（『蘭学緒言』）同『万国地理図説』／。伊良子光顕『外科訓蒙図彙』

同八年・一七七二・本木良永『和蘭地図略説』／前野蘭化『蘭

訳箋』・同『和蘭訳文略』

同九年（安永元年）・一七七二・本木良意『和蘭全軀内外分合図・驗号』（『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解・阿蘭陀経絡図・紅毛銅人形』）／。

河口信任『解屍編』

安永二年・一七七三…杉田玄白『解体約図』

同三年・一七七四…玄白『解体新書』

天明四年・一七八四…志筑忠雄(中野柳圃)『求力(法)論』・

同『三種諸格』

同五年・一七八五…蘭化『和蘭訳筌』／林子平『三国通覧図説』

同六年・一七八六…桂川甫周『新製地球万国図説』／大槻玄沢

『蘭訳梯航』*旧長崎通詞、石井恒右衛門(常右衛門、庄助・

当光)江戸へ来る／田沼意次失脚

同七年・一七八七…森島中良『紅毛雜話』／朽木昌綱『西

洋錢譜』／林子平『海国兵談』／宇田川玄随『蘭学秘蔵』／

蘭化『和蘭点面例考補・附録』

同八年・一七八八…玄沢『蘭学階梯』×田沼意次没(70)

寛政元年・一七八九…朽木昌綱『泰西輿地図説』*三浦梅

園没(67)

寛政二年・一七九〇…玄随『言語品目』(『蘭学秘蔵』)／柳圃『助

詞考』(同上)

同四年・一七九二…玄随『西洋医言』／本木良永『星術本原太

陽窮理了解新制天地二球用法記』／和解例言*日本最初の地動

説の紹介

同五年・一七九三…玄随『蘭訳弁髦』／同『西説内科撰要』

／司馬江漢『地球全図略説』／甫周『漂民御覧之記』…『魯

西亜誌』／玄沢『蘭訳要訣』*林子平没(36)

寛政七年・一七九五…玄沢『蘭学佩觿』／玄白・清庵『和蘭医事問答』／木村兼霞堂『一角纂考』

同八年・一七九六…稻村三伯・石井恒右衛門ら『波留麻和解』

(Hama Woodenboek, 江戸ハル)／定信写『魯西亜語類』

／江漢『和蘭天説』／橋本宗吉『蘭新訳地球全図』／作者未

詳『近來繁栄蘭学曾我』

同十年・一七九八…中良『類聚紅毛語訳』(のち蛮語箋と改題)

／間重富『天地二球用法評説』／志筑忠雄『曆象新書』／本多

利明『西城物語』・同『経世秘策』／作者未詳『蘭学者相撲見立

番付』、玄真が東大関、恒右衛門こと石井庄助(当光)が西大関。

*本居宣長『古事記伝』完成。

寛政十一年・一七九九…玄沢『蘭説弁惑』同『磐水先生随筆

〈十数異言〉／江漢『西洋画譜』／石井庄助『遠西軍器考』

同十二年・一八〇〇…著者未詳『Lamjacksemtel』(古雄元吉『蘭

訳筌蹄』か)／玄沢『六物新志』*昌平坂学問所落成

享和元年・一八一・志筑忠雄(中野柳圃)『鎖国論』*本居宣

長没(72)

同二年・一八〇二…玄白『形影夜話』／小野蘭山『本草綱

目啓蒙』*木村兼霞堂没(67)

文化元年・一八〇四…柳圃『蘭学生前父』・同『蘭語九品集』

／曾昌啓(鑒)・白尾国柱『成形図説』

同二年・一八〇五…柳圃『和蘭詞品考』／玄真『西説医範

提綱釈義』／江漢『和蘭通船』／伏屋素秋『和蘭医話』

文化五年・一八〇八…馬場佐十郎『蘭語首尾接詞考』(蘭語冠

履辞考』としてのち刊行）＊英艦フェートン号長崎侵入

同 六年・一八〇九…吉雄権之助（如淵）『和蘭属文錦囊』／馬

場『野作雜記』同『帝爵魯西亞國誌』＊桂川甫周（國瑞）没（57）

同 七年・一八一〇…馬場・奥平昌高『蘭語訳撰』／。藤林普

山『訳鍵』、『蘭学逕』＊小野蘭山没（82）

文化八年・一八一…馬場・玄沢『厚生新編』／同『和蘭辞類

訳名鈔』／馬場『和蘭文学問答』（西文規範）／吉雄俊蔵（羽栗

豊）『訳規』／本木正栄ら『諸厄利亜興学小笠』・同『弘郎察

辞範』・同『和仏蘭対訳辞林』／橋本宗吉^{始制}『オンダエレキテル究

理原』＊稻村三伯没（54）、天文方に（和蘭書籍和解御用（翻訳局）

を設置

同 十年・一八一三…馬場『魯語文法規範』／武部尚二^{大西洋模夫爾}

日本志図解』／島津重豪『南山俗語考』

文化十一年・一八一四…馬場『訂正蘭語九品集』・同『和蘭文

範摘要』／吉雄俊蔵『六格明弁』・同『六格前篇』

同 十二年・一八一五…玄白『蘭学事始』／。藤林普山『和蘭

語法解』

同 十三年・一八一六…馬場『蘭学梯航』／玄沢『蘭訳梯航』

／。杉田立卿『眼科新書』／高橋景保『満文輯韻』

文政三年・一八二〇…馬場『遁花秘訣』／。玄真『和蘭葉鏡』

同 四年・一八二一…権之助著、宇田川榕庵編『重訂属文錦囊』

／。杉田立卿『微瘡新書』

文政五年・一八二二…馬場^{訳同}『厄利亜語集成』／。榕庵『西説

苦多尼訶經』／。玄真・榕庵『遠西医方名物考』同補遺』／。

俊蔵『西説観象経』

同 六年・一八二三…景保『亜欧語鼎』／。俊蔵^{理学入門}『遠西観象

図説』

同 十年・一八二七…青地林宗『氣海観瀾』／小森桃塙『泰

西方鑑』

同 十二年・一八二九…権之助『英吉利文話之凡例』／。伊藤

圭介『泰西本草名疏』

以上

以上、ごく大雑把ながら、一覽して定信が老中首座になってから、ことに蘭書の翻訳（出版）や基礎的な語学関係書（写本）が輩出していることも判明する。

定信は安永三年（一七七四）、十七歳のとき、奥州白河（川）藩主、松平越中守定邦の養子となるが、このときから（定信）と名乗り、実質的にはいよいよ定信の時代となる。定信の実父は歌人として有名な田安宗武である。そして天明三年（一七七四）二十六歳のとき、養父の後を嗣ぐ、ちょうど田沼意次が若年寄となったときでもある。蘭学はまさに隆盛の一途をたどるわけである。おそらくこの前後から、定信はとくに医療と蘭学に関心をもち、後述のように、天明六、七年ごろ当時としては実力一とも考えられる旧長崎通詞、石井恒右衛門を配下に得、また、庄内藩医、前田長庵との接触をこの前後に果すことになると考えられる。

前田長庵と定信 前田長庵は医師、健康上の相談人として定信と接触をもつが、両者の出逢いは、やがて江戸期最大の翻訳事業、R・ドドネウス *Dodoneus: Herbarius of Crydt-boeck* の翻訳となる。定信は多紀氏の躋寿館を幕府の医学館とし、またこの時代には、医学方面にあつて外科・内科・眼科関係書のほとんどすべてが翻訳出版される。『西説医範提綱釈義』のように、〈鎖骨・脾臓・靱帯・腺〉など明治―現代と使用の医学用語の確立をみる。また、『眼科新書』の訳語などもその多くがそのまま明治に受けつがれるのである。さらに、天文学・暦学・物理学関係の訳書、そして何よりも、文典の編集と〈品詞〉をはじめとする文法用語が、さらには、蘭日対訳辞典から、『亜欧語鼎』などアジョーロッパ語対訳辞典など、基礎学習用としての文典や辞典の編集、翻訳がある。もはや昔日のような、読書百遍意自から通ずといった無手勝流とはちがひ、よくオランダ語に熟達した士が出現し、正確な翻訳書が公刊されるようになるのである。こうした史的背景のもとに、定信自身がR・ドドネウスの“*Crydt-boeck*”の翻訳を実現する。この詳細については、〈R・ドドネウスの“*CRYDVT-BOECK*”とその翻訳〉(以下、単に〈小論とよぶ〉)と題して小論をものしたことがある⁽¹⁾。そこでは、書誌的な点をふくめ、定信の企画以前におこなわれたR・ドドネウスの翻訳小史―すなわち、野呂元文、吉雄藤三郎による『阿蘭陀本草和解』、平賀源内、吉雄耕牛による『鐸度涅烏斯絵入』、『独々匿烏斯本草アベ

セ類聚』などについて考察、いわば万治二年(一六五九)、時の甲比丹、Z・ワーヘナール *Wagenaar* が、老中、稻葉美濃守正則に、ドドネウス『西洋草木譜』(一六四四年版)を献上して以来、將軍吉宗による同書に関する甲比丹への質疑などについても略述しておいた。この西洋本草書の翻訳考察に十二分の補強をしたのが、いうまでもなく、このころ隆盛となった伝統的な日本(本草学)である。やはり定信の時代に一つの頂点に達する発展をみせた。

さて〈小論〉では、西洋本草書の訳書について、現存の草稿本と浄書本の二種三類の訳稿二十一冊および残存の校正刷によって全貌を推定しておいたわけである。また、原文と訳文との対比によって、いかに翻訳が正確にまた適切に訳されているかなども吟味してみた。しかし、定信らの用いた原本は一六一八年の再版本である点、同原本は入手できず、ために対比考察の結果はやはり若干の喰違いを認めざるをえなかった。しかし考察を公表したのち、早大図書館で、定信らが用いたと思われる一六一八年版の“*CRYDVT-BOECK*”を購入、これまで不明であつた翻訳書成立の経緯を詳細に知ることができる添付文書も手にすることができた⁽²⁾。その一部は小論に追補の形で翻刻しておいたが、ここにあらためて、その資料、〈西洋一千六百十八年明万曆四十六年即元和四戊午年鑲刻(明治二十六年)／⁽¹⁾列葉別／⁽²⁾爾維斯 独度涅烏斯草木譜／⁽³⁾翻訳上木事件／⁽⁴⁾元田遺上書奉呈下案〉(内題、遺呈草木譜草案)により、翻訳の経緯を吟味してみたい。原本の一部を小著に写真版で示しておいたが、全体を八冊に分冊し、表紙をサラサでおおう改装本とし、外

題に「遠西独度涅烏斯草木譜」と貼題箋によって漢字で示している。この体裁からも、翻訳に用いた原本であると推定できるのである。

3

《草案》と翻訳掛人名 《草案》を吟味する前に、上述の小論で明かにしたところを要約的に示しておきたい。

まず(一)訳者であるが、現存の訳稿はA/B・Cの二種三類に分けて考えられるがあるが、このうちAが最終の浄書本と考えてよく、編集者訳者などはつぎの四名である(訳本第二巻初編の巻頭)。
東都 吉田正恭 修定／桑名 石井当光 原訳／長崎 羽栗 費 補訳／会津 荒井行順 校

* 右は草稿本へC)ではつぎのとおり、参考までに記す。

陸奥白河 石井当光 原訳／江戸 吉田正恭 修定／肥前長崎 羽栗 費・陸奥会津 荒井行順 助訳

石井当光(庄助)の所屬藩に異同のあるのは、白河藩から伊勢桑名藩に転封したからで、その時期は文政六年(一八二二)、定信、六十六歳のときである。

第二に現存の校正刷からも推定できるところがあるが、出版の形に整備したのは右にみえる吉田正恭(九市)で、彼により、《序・叙・原著訳者の肖像・略伝・題言》をそなえて首巻一冊にまとめ、翻訳書としての体裁を整えた由が明言されている。しかして、これにはつぎの人物による執筆ということも判明している。成立時とも関連がふかいのであらためてつぎに示す。

1序…文政丁亥秋月(十年) 法眼栗本昌蔵瑞見撰 2序…文政癸未秋八月(六年) 櫻台 大槻茂質撰、源弘賢書 3叙…天保十三年(貼紙に天保十四年) 歳次癸卯正月 桑名教授臣片山器謹序 * 後出の《片山理助》と同一人物。 4肖像…独度涅烏斯肖像／郭留識烏斯肖像 簡齊直之臨写／5略伝…列莫別爾細斯独度涅烏斯、葛祿留斯郭留識烏斯 文政戊子小春(十一年) 桂国寧 清速識／6題言…遠西草木譜 文政辛巳秋九月(四年) 吉田正恭識

右の1～6を年代順にすると、文政四年(一八二二)・文政六年(一八二三)・文政十年(一八二七)・天保十三、四年(一八四二、四三)のようになる。そして一般的には《題言》は翻訳完了したうえで記すものという性質からいけば、文政四年の時点で全訳完了と考えていいかと思う。あと《序》などは、むしろ、つけたりのちに用意されるものである。他の草稿本ともならみあわせ、小論では《文化十三年ごろ初稿が完了し、約五年間ほどをついやして修定し、文政四年のころ定稿を得た》と結論を下したが、これは現在でもかわらぬ結論である。わたしが《C》本と分類した一本の第三冊目に、《板行焼失再刻ノ分／文政八乙酉二月十二日(発筆)》と記録がある点、この文政八年(一八二五)には板下の準備もすめられていたこと、また板木焼失の火災も、岡村千曳先生のいう文政十二年云々の一度のみでなく、それ以前にも火災の難を受け、その補いがおこなわれたことが推定できるわけである。火災の憂き目には一度ならず二度(あるいは三度)もあっていると考えられる。たゞし、小論では天保十三(四)年の片山の叙は時

代的にさらにのちとなる点、疑問のままとした。これはたとえ、最終年を文政十二年としても、それから考えてさらに十年余も時間が経過しているわけで、その間何か事件があったことが考えられるわけである。後にのべるように、定信の後嗣の健康状態などの問題がからむ、いわばお家の事情からであろう。

さて、第三の点として石井から吉田へのバトンタッチは、〈題言〉に、〈白河侯臣石井庄助(貼紙は当光)承君命下手、蓋吾邦啓発荷蘭本草之書、以是人為草創、惜乎其功未竣而下世、其業久廢矣〉とある点に注意しておいた。石井の翻訳をオランダ本草学の草創という評価もみのがせまい。中止が火災などによるのではなく、また文政四年以前のことである点も明白である。その点、吉田の〈題言〉では石井没後に、大槻玄沢に依属したこと、しかし玄沢も辞し、ついに吉田が引受けたということを吉田自身が記しているわけである。浄書本で、石井を桑名としているが、転封は上であつたように文政六年であるから、この時点ですでに石井は他界していたと思われる。草稿本に、〈陸奥白河 石井当光 原訳〉とあるが、それとも一致するのである。したがって浄書本が桑名としたのは最終出版が転封後、桑名藩としての事業となつたため、体裁を整えるためであろう。

ほぼ以上の点に要約できるのであるが、ここにはからずも、上述のような〈草案〉の出現をみたことである。〈草案〉は購入した原本とともに、こよりによる仮綴体裁の小冊子として添えられていたのであるが、さしあたり全文を小著で翻刻し、紹介にとどめたわけである。この〈草案〉のうち、まず注目されるの

は、〈田井氏奉呈遺書ド、ネウス翻訳掛人名〉(以下、「翻訳掛人名」と略称)である。あらためて全文をつぎに抜きだす。

田井氏奉呈遺書ド、ネウス翻訳掛人名
出羽庄内医師 前田長庵言上

若狭 医師 杉田玄伯ド、ネウス賃上

石井常右衛門翻訳

〃 粹文十郎助手被仰付

京都物産家 小野蘭山
薩 摩 曾昌啓

右両人へ植物鑒定被仰付

江戸 医師 福田宗玄
田代玄通

瀧尾玄仲

山上杏樹

島 松庵

右五人へ翻訳校合方被仰付

白川医師若手 小川玄益

中村流謙

林 昌桂

内山昌貞

右四人へ翻訳書訂正方被仰付

作州津山医師 宇田川玄真

奥州仙台医師 大槻玄沢改正翻訳主任

山上養貞

島 松貞

右兩人玄沢出席之節助手被仰付

江戸処士医 吉田長叔（翻訳加勢被仰付後辞退ス）

長崎大通事門人 吉田九市

是人附録序文迄現今ノ読本風之改正翻訳殆ント三十八年掛り日夜勉強遂ニ初篇迄効ヲ奏ス

大槻玄沢栗本瑞見序文御頼アリ

広瀬台八

片山理助

右兩人ヘド、ネウス翻訳の御趣意ヲ認候様被仰付タリ而
文政十二丑年御開版可被仰付之二月ノ御病氣五月御逝去
トナル

其年三屋敷御類焼ニテ板木焼失天保十三年残リ之分漸ク取調出来候処其後板木封切ニ相成候

* 裏表紙裏に「（田井氏丹波修治）」とある。

右を一見して、すべてで二十三名であるが、これまでまったく記録にみえぬ人物が十七名は登場する。この「翻訳掛人名」には「本文」といふべき部分が先行するわけで、以下、その冒頭から本文を引用しつつ、いかにして定信がこの翻訳に関心をもち、積極的に前田長庵のことばに耳を傾け、翻訳が進行したかを推知記述してみよう。

遣呈艸木譜草案

守国院様御在世中、遠西草木譜翻訳并御開刻被仰付候、御企者
医者人命に係候、不容易緊職ニ候間、御若年之頃々折々医を召

して義論も御聴被遊、大医高名之聞之有者、出府仕候へば必ず
召して御尋被遊（後略）

右のように定信は医の重大なことをよく認識し絶えず医師との接触をはかっていたことが判明する。つづけて、へまだ世に発見せざるものノ秘法も書に遺していまだ製方不伝、或は針灸逸法また家々の秘法得がたき奇薬、異邦之薬物までも御穿鑿」という熱心ぶりであった。こうしたとき、たまたま前田長庵と出逢った由をのべる。長庵は「其比有名之医、就中脚氣之療法を自得して世に行はれたる者」であった。そして定信も「年々御下部水氣御患被遊」という。おそらく脚氣のようなもので、脚にむくみがきていたのであらう。そこで長庵が診察し調剤など処方もおこなったとのべる。

上でふれたように、天明三年に白河藩主となっているので、
「出府仕候へば」というのも、白河藩主として国元におり、とき々「出府したことをさす。また「若年之頃々」とあるから、おそらく藩主になる以前から医師との接触を多くしていたことも判明する。こうして、やがて長庵が「近來蘭学世上ニ好候者御座候」彼国用窮理の学法、其委曲微妙、和漢之書籍より更に異候もの」と言上し、「近來之新渡彼国の医書、本艸ド、ネウスと申候を披見仕候」と語ったわけである。近來とはいづごろをさすか明示されてはいないが、定信の履歴や長庵の事蹟、さらに蘭学愛好者の増加しつつある点から推定して、定信が老中となる前後かと思われる。芝居番付に見立てて作成の「近來繁蘭学曾我」（寛政八年一七九六成）を考えに入れば、ほぼ十八世紀末と推定して誤りあ

るまい。具体的には天明六、七年（一七八六、七）が〈近来〉の一つのポイントかと思う。折もよし、石井恒（常）右衛門が江戸に來たことを定信はしるのである（これを早速雇ったわけである）。

長庵はドドネウスを披見して、中國、李時珍『本草綱目』にないものも出ており、〈其主治用法漢法異同亦不少候〉とのべている。したがって長庵も多少はオランダ語を解したか、あるいは通詞をして読解してもらったところがあったと思われる。〈其比有名之医〉とはあっても現在では長庵の事蹟はほとんど不明で、小論に發表した以外、新しく加えるところはない（長庵は享和三年（一八〇三）に死没している）。

長庵は定信に翻訳の必要を説くが、自から〈我々式之者にては力及不申候〉とものべる。また、新渡の原書は公儀にもなしということで、所蔵しているのは杉田玄白ということが判明、これを定信に告げる。定信は玄白に交渉して同書を貸してもらい、翻訳が実現することになるのである。当時の玄白が大名衆よりも豊かなほど、年間四百〜五百両の収入をもち、蘭書を購入していたこともしられる。定信も玄白とは接触しており、身分関係からいってもこれを借用することはたやすかったと思う。これまで翻訳の原本が玄白所蔵のものと判明していなかったたので、今回の資料による新事実である。「翻訳掛人名」は、〈出羽庄内医師 前田長庵言上／若狭 医師杉田玄白ド、ネウス貸上〉とあるのは以上の事情を示すわけである（ただし借用ではなく最終的には買上げたか）。

さて原本が石井に渡されるのであるが、その点はずきのように

みえる。

御披覽被遊、右石井常右衛門え為此読御聞被遊、則翻訳被 仰付候、然処常右衛門も此書大部にて壹人之力ニ而翻訳迎も難及候得共外に此書可読者無之候ニ付、生涯之力を尽及丈は翻訳可仕併迎も一代ニ成就難出来段役所え申奉、夫ヨリ日夜朝暮是のみニ掛申候、常右衛門其後老年とて粹文十良を助筆被仰付候右のとおりである。ここで「翻訳掛人名」に〈石井文十郎助手被仰付〉とある点も了解できるのである（これも、新事実である）。文十郎は、寛政十年（一七九八）成立「蘭学者相撲見立番付」に、西前頭四枚目にあり、〈前頭自川石井文十良〉とある。同番付で司馬江漢は前頭六枚目、桂川甫謙は同十二枚目とあり、それらと比しても実力のあることが推定される。また上掲の「近來繁栄蘭学曾我」では〈一源の頼家公 石井文次〉の役どころとなっている。岡村千曳先生が、〈石井庄助の息であるかも知れない〉（『紅毛文化史話』）と推定されたのは、ここで断定にかえることができ、配役からいけば、それなりに高い評価を得ていたことも推測できよう。こうして石井父子二代にわたる翻訳となったことがしられる。これも従来まったく未詳だったところである。

なおこの芝居見立番付の〈時代狂言の凡例〉に、〈白川の訳司如來の光とて諸願成就の大仕事と、暗に石井当光の評価の一端がみえる。これは別に石井が力をそそいだいわゆる『江戸ハルマ』の刊行が寛政八年である点と関連することであろうが、大願ではなく、〈諸願〉とある点はみのがせず、この前後から石井はもっぱらドネウスの翻訳に専心したと考えると、定信が

長庵の意見を入れて、老中を辞した寛政五年（寛政八年の間、より限定すれば寛政五年ごろから翻訳に着手したことが推定できるこの点、「翻訳掛人名」の吉田九市のところに、〈改正翻訳始ソド三十八年掛リ〉（文政十二年を終点とする言い方）とみえるから、さかのぼると寛政五年（一七九二）ごろとなる。多少の差をみてもやはりここで類推した時期は動くまい。しかし以後、いつまで石井は翻訳をつづけ、いつごろ死没したか、未詳である。間接的には二つの資料がある。一つは文化十二年に成立の『蘭学事始』に、石井が〈其業（ドネウスの翻訳）を卒へずして是亦異客となれり〉とあること、また後出するが、訳稿の本草をチェックした小野蘭山が、文化七年（一八一〇）には他界している点、おそらく、文化四、五年ごろまで約十五年間翻訳をつづけ、七、八年ごろには石井も死没し、文十郎が志をついだものの、ほとんどそのままの状態で、〈草案〉にのべるように、一時、翻訳もチェックも棚上となって四、五年が経過したと思われる。

4

翻訳に参加した学者たち さて、翻訳ができて、〈蘭語の儘出候処此草何物か知る者無之候〉ということで、〈其比京都ニ而小野蘭山と申物産家、薩州之曾昌啓と申者、此兩人者当時之物産高名の者に御座候〉というわけで、「翻訳掛人名」にみえる〈京都物産家 小野蘭山／薩摩 曾昌啓 右兩人へ植物鑒定被仰付〉ということになるのである。いわゆる同定の作業である。ここで注意されるのは蘭山のことである。彼の死没とここで〈京都物産

家〉とあるところからして、蘭山が幕府の医学館教授になる寛政十一年（一七九九）以前に、すでに石井の訳稿がある程度できあがってこれをチェックする段階にきていることを裏付けるわけである。したがってわずか五、六年ほどで、石井はかなりの量の翻訳——もっとも原本は全体約一四〇〇ページと膨大である——を成しとげたことも推定できる。さらに、享和・文化と時代とともに翻訳に従事していくのであるが、〈草案〉では〈初部過半浄書仕差上候〉とあるとおり、十五年ほどをついやして訳稿も量的に多くできあがったので、校合をかねて白河藩の若手医師にもその立場から、訂正・補説をおこなわせたのである。「翻訳掛人名」に〈白川医師若手 小川玄益〉以下三名が挙り、さらに〈江戸医師福田宗玄〉以下四名がみえる。これについて、〈草案〉の本文では前者について〈普通読本体に清書草稿仕差上候〉といい、後者については、〈一統考申上候様被為下〉とみえる。一種の整理ということであろう。この九名は多少はオランダ語も解したのであろうか。しかし〈白川御医師斗ニ而ハ大成仕御上木迄ニハ相成間敷被申論ニ相成、其儘暫被指置候〉とある。結局、かなり分量の翻訳は完了したものの江戸、白河の医師では力不足でこれを書物の形に整理することもできず、傍観ということになったわけである。これについて、本文では訳文（直訳と思われる）が重複や語呂が不定、不分明などと欠点があつて、原文と比較していかないと理解できぬ迷文体であつたよしをのべている。〈何分今人の耳に入難く綿密致密、読あぐみ候に付上にも何分御当惑被遊候〉というわけである。綿密緻密な訳文なので難解というのもおかしなこ

とで——のち、吉田はこの翻訳を高く評価している——あるが、そこはやはりオランダ語やその直訳文に不馴れなものには、理解をこえたというところがあったのであろう。

そのうち石井は死没、杵も未熟とて、そのころ著名な〈津山宇田川玄真、仙台大槻玄沢、吉田長叔〉のうち、玄沢に定信自から〈追訳井上木迄〉をじきじきに懇請したのである。しかし、〈草案〉には、玄沢は引受けたものの、一回の会合でも三字、四字を解するのみで、〈甚難渋仕、吉田長叔加勢相願候〉となった。がしかし、長叔もまた、その難解さから辞退したという経緯である。玄沢は〈至而之古書、近国弘即察、羅典と云古字を書加へ古義にて何分読兼〉と告白している。

かくして、〈玄沢とくと相考候而吉田九市殿を奉勸〉ということになったのである。上で引用の〈草案〉の本文からして、文化十年と十二年のころかと思う。小論でもふれたがこの吉田九市（正恭、恭）は「蘭学者相撲見立番付」はもとより、まったく蘭学者として当時の評価が残っていない謎の人物である。しかし、玄沢（一七五七—一八二七）も吉田の翻訳を〈条理井然莫可間然者／其立志者長庵而石井氏草創之、九市討論修飾之、既因数人之力而終成其業〉（序）と評しているように、あるいはまた、桂川国寧（一七九七—一八四四）も〈吉田九市、奉桑名老侯之囑、訳修遠西草木譜、其功尤偉矣〉と評しているごとく、吉田の力は保証済みで、その功は賞賛されている。ということは、当時において、その実力は第一級品であり、これまでまったく不明な学者であったことが不可思議といわねばならない。すくなくとも当時も現在も正当

に蘭学史に位置を与えられていない大学者である。ただし編者不詳『本朝医家著述目録』（昭和十年刊）に、〈吉田正恭、号魯鈍齋、字和三〉として、『本草和品放』以下七本の著書があげられていて、必ずしも無名とはいえない。また、玄真については、名のみで、この翻訳事業とどうかかわったか未詳である。〈長叔〉は一般には長叔であるが、当時も高く評価されている。しかしやはり吉田九市に及ばぬところであろう。すでに小論で紹介しておいたが、吉田は桂川国寧（一七九七—一八四四）と親しい関係の記述のあるところなどから類推して、〈小論〉ではその語学力は桂川家との接触乃至は師事と推定したのである。しかし今回の資料により、〈長崎大通事門人〉という新事実が判明した。

いうならば十八世紀後半での有力にして優秀な大通詞に指導されたこと、あえて具体的人物をあげれば、吉雄耕牛などに指導を受けたことが判明したのである。耕牛はすでにドドネウスも一部翻訳しており、時期的にもほぼ妥当しよう。ただ語学という点で特定の一通詞に師事しただけでなく、長崎大通詞の数人に指導を与えているとも考えられよう。いずれにせよ、吉田の絶賛に価する翻訳は大通詞に師事して、語学的基礎をしっかりと構築した当然の結果といえよう。新資料により、江戸蘭学史の真の姿がこうしてすこしずつ訂正され補強されていくわけである。既成の史家による蘭学者への評価もまた再検討すべきである。

さらに〈草案〉の本文は吉田の学問について、〈此九市は長崎大通事に（蘭学）習ひ物産ハ小野蘭山、当時之蘭之本草家は此一人と而、物産釈解相兼且著述家に而功者〉と推挙されたこと、や

はり当代随一の本草家、小野蘭山に本草学は指導されたのである。まことに時代はこの稀有にして優秀な人材を定信におくりとどけたということができよう。反面、いかに通詞らの力が江戸の学者たちにまさっていたのかも実証されるわけである。

寛政十一年（一七九九）に石井は『遠西軍器考』を定信のために翻訳しているようであるから、この時点では翻訳に脂ののついているときと考えてよからうか。いずれにせよ、R・ドドネウスの翻訳は死後、一時、棚上げされ、やがて大槻玄沢の手にゆだねられ、さらに最終的には吉田がまとめることになったのである。なおまた、文化十一年、羽栗費こと吉雄俊蔵が江戸に來ているから、時によし、定信―吉田の縁でこの機に翻訳の助力を願ったと思う。費も実力があり、有力な助人となったと思う。しかし〈草案〉にはまったくふれられていないのはこれまた不思議である。

石井の草稿は数年、そのまますておかれ、文化七、八年（一八一〇、一一）ごろから吉田が引受けたと思う。文政四年（一八二一）まで、約十余年の歳月が流れる。またもう一人の重要人物、旧長崎通詞、荒井行順（庄十郎）は、石井よりむしろはやく江戸に來ていると思われるが、〈草案〉にはまったくふれられていない。

このようにして最終的には約千四百ページの原本の翻訳は、文政十二年（一八二九）に完成――現存のものから類推して、全体で百八十冊ほど――したが、「翻訳掛人名」にのべているように、〈文政十二年御開版可被仰付之處二月御病氣御逝去トナル、其年三屋敷御類焼ニテ板木焼失、天保十三年残リ之分漸ク取調出來候処其後板木封切ニ相成候〉（後述参照）と、そのまま開版もまた

延期されたというわけである。〈草案〉の本文では、文政十二年の江戸大火による類焼は〈梶町急火類焼〉とも表現している。

定信の死後〈三ヶ年諸向御見合被仰出〉とあったので、翻訳出版は一時停止ということになるが、子の定永（保国院）も、天保九年（一八三八）に四十八歳で死去、そのあとをついだ定和も天保十二年に三十歳で死去という不幸に見舞われ、したがって、天保十三年までに焼失した板木を補修彫して万全を期したわけであるのになかなか刊行は実現にこぎつけず、そのうえさらに、定和のあと、天保十二年にあとをついだ。十二代目の猷（天保五年・一八三四）安政六年・一八五九没。二十六歳）は、まだ七歳と小さいので、〈御上御成長之上、思召を以御開版被遊候まで、此儘封切被差置候趣〉という情況になってしまった。さらに〈板木多分焼失仕候ニ付、追々右之調申付、去ル天保十三年取調出來仕、差上申〉とあり、〈草案〉の最終をつぎの文言で結んでいる。

守国院様多年之御心勞を被為尽候翻訳の儀に付、何卒往歲御遣念被為継候而御開版被 仰付御献上も被為在候者 御黄泉下におゐて御満足可被遊哉と奉恐察候右之御指趣意初之

尊意私伺罷在候へ共、最早老年にも及び明日も難計身分と罷在候へば、御大意荒増書取認置奉申上候儀に御座候 以上

天保十四年九月十日 田井柳蔵 謹書

右のとおり、全冊翻訳完了し、板木も完備し出版するばかりになつて天保十四年を迎えていることがしられる。〈御開版被 仰付御献上も被為在候者……〉と仮定表現をとっているのもそのためであろう。おそらく天災と戦災で焼失しなければ、原稿も板木

も現存しているはずで、早大の所蔵以外に未発見の分が、どこかに眠っている可能性も十分に考えられると思う。なお定信の侍臣、田内親輔による「守国公御著述目録」に定信の著、百三十八部といい、致仕し給ひし後の御筆記」中に、へ遠西草木譜六冊」がみえる。もちろん数量的にも疑問で、今後のさらなる調査検証が必要である。

注(1) 小著『江戸蘭語学の成立とその展開』(早大出版部)所収「R・ドネウスの「CRVYT-BOECK」とその翻訳」を参照。

(2) Rembertus Dodonaeus (Rembert DODOENS) は一五二七年ベルギー(当時はフランドルス)に生れ、一五八五年ライデンで

没。『Herbertus, oft Crvydt-Boeck』の初版は一五五四年、三十七歳のとき。オランダ語版の初版は一六〇八年、ライデン刊。一六一年はその再版本。訳者は J. van Ravesteyn。(魏斯普漢楽歌令件)。なお近藤正斎『好書故事』巻第八十・書籍三十、蘭書三、本草につぎの記述がある。

独々涅烏斯本草集成一冊(真図若干枚)

原名コロイドブーク、ハン・レムベル、チユス、ドドネウス／入

爾馬泥亜国レムベルチユースド・ネウス撰、千六百十八年(我元和四年戊午)

和蘭国レイデンノ地ニ於テ其地ノ印刷家フランコイスン、ラーヘン

ゲン印行ス。按ニ此書巻中各編ノ終リニ本草諸家更ニ附言ヲナシ、

巻末ニハ東方諸國ノ草木ヲアツメ附録トナスコト、同國の士カーロリユクリュシウスの手ニ出ツ

新刊紹介

内山美樹子著

『浄瑠璃史の十八世紀』

「本書は、十八世紀浄瑠璃史諸問題の考察を通じて、劇とは何か、の探究をめざすものである」。浄瑠璃史における十八世紀とは、歌舞伎をも凌駕した最盛期であり、その創作という見地から見ても、日本演劇史上際立って充実した時期であった。内山氏は、従来とかく軽視されがちだった事柄に対し、綿密な調査と周到な考察とを

試みて、演劇の本質に迫ろうとされる。しかも、それは創作の背景を成す政治性や社会性をも鋭く剔抉して余すところがない。私達は、本書に導かれて時代とともに生き、浄瑠璃の息吹きに触れることができる。近松、並木宗輔、近松半二という三人の作者に関する論考を柱に構成された本書が、氏の積年の研究業績の集大成であることは言を俟たない。のみならず、本書の大部分が書下しである点と、たとえ旧稿であろうと、そこに丹念な加筆訂正が施されている点とは注目に価する。すなわち、著者自身

今、何を問題にしているのかが、読者の前に赤裸々に開陳されているのである。そして、これはそのまま研究史の現在にとって最も先鋭的な問題提起に他ならないだろう。それにしても、『浄瑠璃史の十八世紀』とは、何と広々とした展望をもつ新鮮な書名であることか。私達は刺激に満ちた本書からこの新鮮さをも学び取らねばなるまい。(平1・10 勉誠社 A5判 六四六頁 一七五一〇円)

〔村田裕司〕